

第2回日本サルコペニア・フレイル研究会開催にあたって



東京大学大学院医学系研究科
外科学専攻整形外科学
教授 田中 栄

このたび第2回日本サルコペニア・フレイル研究会を担当させていただくことになりました。本会の主題は「ロコモティブシンドロームとサルコペニア・フレイル」とさせていただきます。フレイルは高齢者が筋力や活動が低下している状態(虚弱)を指し、日本老年医学会が提唱した概念です。フレイルと密接に関連した病態がサルコペニアであり、これは加齢に伴って筋肉が減少し、握力や歩行速度の低下など機能的な側面をも含めた概念です。これらの進行は高齢者のADL, QOLを損ねるため、高齢化が進むわが国において、その対策は急を要します。一方日本整形外科学会では2007年に運動器の障害のために介護をうける危険の高い状態として「ロコモティブシンドローム(ロコモ)」という概念を提唱しました。ロコモは筋肉、骨、関節、軟骨、椎間板といった運動器のいずれか、もしくは複数に障害が起き、歩行や日常生活に何らかの障害をきたしている状態です。現在、日本整形外科学会を中心にロコモの活発な広報活動が行われ、それと平行してロコモに関係するエビデンスも蓄積されてきています。このように高齢者の虚弱化については様々な方向からアプローチが進められており、その概念はオーバーラップしている部分がある一方で異なる部分も存在します。第2回研究会ではこれらの疾患概念の異同に迫りたいと思います。

本研究会を医師のみならず、管理栄養士、療法士、看護師、薬剤師、社会福祉士など様々な医療・介護専門職及び基礎医学分野の研究者との交流の場として開催することにより、ますます深刻化する社会の高齢化に向けた対策の一助としたいと思います。皆様のご参加をお待ちしております。何卒よろしくお願い申し上げます。

第2回 The 2nd Annual Meeting of Japanese Study Group on Sarcopenia and Frailty 日本サルコペニア・フレイル研究会研究発表会

ロコモティブシンドロームの現状と対策

10/4 SUN

演題登録期間

平成27年6月3日～8月20日

ホームページ開設中

東京大学伊藤国際学術研究センター

- 10:00～12:00 スポンサーシンポジウム「サルコペニア・フレイルのトピックス:基礎から臨床まで」
座長 葛谷 雅文(名古屋大学)
荒井 秀典(国立長寿医療研究センター)
- 12:10～13:00 ランチョンセミナー
- 13:10～14:00 基調講演
講師 中村 耕三(国立障害者リハビリテーションセンター)
座長 田中 栄(東京大学感覚・整形外科学)
- 14:10～15:10 ポスターセッション
- 15:20～17:20 シンポジウム「ロコモティブシンドロームの現状と展望」
座長 原田 敦(国立長寿医療研究センター)
吉村 典子(東京大学医学部22世紀医療センター)

【一般演題登録カテゴリ】

1. 基礎研究
2. 疫学研究
3. 診断・病態学
4. 栄養関連
5. 運動・リハビリテーション
6. 嚥下・口腔関連
7. 薬物療法
8. ロコモティブシンドローム
9. カケキシア(悪液質)ならびに疾病関連
10. 術後ならびに廃用
11. 看護ケア
12. 予防・医療行政

Conference Report

第29回日本老年学会総会 合同大会 良質な超高齢社会を拓くー学際的研究の進展と深化をめざしてー

第29回日本老年学会総会(6/12-14 横浜)に参加して

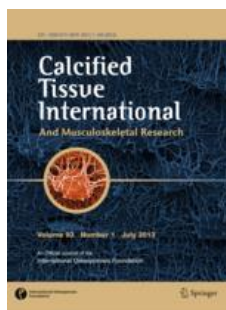
平成27年6月12日から14日までパシフィコ横浜において、第29回日本老年学会及び老年学会を構成する7学会が、「良質な超高齢社会を拓く-学際的研究の進展と深化をめざして-というテーマで開催されました。全体で約6000名の参加者があり、各会場はおおむね満員で活気にあふれていました。

学会は、シンポジウム I「新しい高齢者の定義」からはじまり、医学、疫学、心理学、社会学、歯学の立場から、高齢者の定義はどうあるべきかについての議論が行われました。このシンポジウムから直ちに現在65歳以上で定義されている高齢者について、年齢の基準を変えるという結論にはなりませんでしたが、現在の日本人の高齢者は体力的にも知能的にも若返っている可能性が指摘されました。7学会合同シンポジウムにおいては「超高齢社会におけるフレイルを考える」というテーマでフレイルに関するシンポジウムが開催され、医学会・歯科学会共催でオーラルフレイルに関するシンポジウムが開催され、いずれも会場はほぼ満員で、参加者の関心の高さを示しました。口演やポスター発表においてもサルコペニア、フレイルに関する多くの発表があり、約1年間で「フレイル」がしっかり浸透している様子が見て取れました。

次回の老年学会は2017年6月名古屋国際会議場にて開催されます。是非とも参加してください。

(荒井秀典)

論文紹介



Tanaka KI, Kanazawa I, Sugimoto T.

Reduction in Endogenous Insulin Secretion is a Risk Factor of Sarcopenia in Men with Type 2 Diabetes Mellitus.

Calcif Tissue Int 2015, DOI
10.1007/s00223-015-9990-8.

糖尿病があるとサルコペニアが早期にみられ、筋力低下の進行も早いことが過去に示されており、その機序として主にインスリン抵抗性が考えられていますが、まだ十分に解明されているとは言えません。この論文では、2型糖尿病男性患者(n=191、60歳平均、糖尿病歴約10年、インスリン非使用者)を対象に、内因性インスリン分泌指標とサルコペニアとの関連が検討されています。サルコペニアはDEXA法でRSMI(四肢筋量/身長²)を計算し、6.87kg/m²未満で判定しています。サルコペニア群(n=85)は、非サルコペニア群(n=106)と比較し、高齢、糖尿歴は長く、HbA1cは高値、BMI、IGF-1、空腹時インスリン(fIRI)、空腹時CPR(fCPR)、尿中CPR(U-CPR)、RSMIはすべて低値でした。サルコペニアを従属変数とした多重ロジスティック回帰分析では、fIRI、IGF-1、HbA1cと並びfCPR、U-CPRが独立した関連因子として抽出されました。この結果から、内因性インスリン分泌の低下は、IGF-1等とは独立した糖尿病関連サルコペニアのリスク因子であり、内因性インスリン分泌の保持がサルコペニア予防に重要であることが示唆されました。内因性インスリン分泌の低下により引き起こされる高血糖が影響するのか、AGEsの蓄積などが関与するのか、今後の基礎的な検討が必要ですが、これまでにない新しい概念であり、興味深いと考えます。

(杉本研)

研究会役員 日本サルコペニア・フレイル研究会

Japanese Study Group on Sarcopenia and Frailty

代表世話人

荒井 秀典 国立長寿医療研究センター

世話人

秋下 雅弘 東京大学医学部附属病院老年病科
安藤富士子 愛知淑徳大学健康医療科学部
飯島 勝矢 東京大学高齢社会総合研究機構
石井好二郎 同志社大学スポーツ健康科学部
遠藤 直人 新潟大学医学部附属病院整形外科
金 憲経 東京都健康長寿医療センター研究所
葛谷 雅文 名古屋大学大学院医学系研究科
神崎 恒一 杏林大学医学部高齢医学
小原 克彦 愛媛大学大学院医学系研究科
佐久間邦弘 豊橋技術科学大学 健康支援センター
佐竹 昭介 国立長寿医療研究センター病院
真田 樹義 立命館大学スポーツ健康科学部
重本 和宏 東京都健康長寿医療センター研究所
島田 裕之 国立長寿医療研究センター自立支援研究室

下方 浩史 名古屋学芸大学大学院栄養科学研究科
鈴木 隆雄 国立長寿医療研究センター研究所
田中喜代次 筑波大学体育系(健康増進学)
田中 栄 東京大学医学部附属病院整形外科
原田 敦 国立長寿医療研究センター病院先端診療部整形外科
平野 浩彦 東京都健康長寿医療センター研究所
古名 丈人 札幌医科大学保健医療学部理学療法学科
堀江 重郎 順天堂大学大学院医学研究科泌尿器外科
吉村 典子 東京大学医学部附属病院22世紀医療センター
吉村 芳弘 熊本リハビリテーション病院
若林 秀隆 横浜市立大学附属市民総合医療センター

監事

小川 純人 東京大学医学部附属病院老年病科
杉本 研 大阪大学大学院医学系研究科内科学講座

顧問

大内 尉義 国家公務員共済連合会虎の門病院
鳥羽 研二 国立長寿医療研究センター病院
中村 耕三 国立身体障害者センター

(2015.6.14)

関連学会

The 16th Congress of PENSA (第16回アジア静脈経腸栄養学会)

2015年7月24日~26日、名古屋国際会議場

37th ESPEN Congress on clinical nutrition and metabolism

2015年9月5日~8日 リスボン、ポルトガル

第70回日本体力医学会大会

2015年9月18日~20日、和歌山県民文化会館

IAGG Asia & Oceania 2015 (アジア・オセアニア国際老年学会議)

2015年10月19日~22日 チェンマイ、タイ

第5回日本リハビリテーション栄養研究会学術集会

2015年11月28日 県立広島大学

8th Conference on Cachexia, Sarcopenia and Muscle Wasting

2015年12月4~6日 パリ、フランス

編集後記

日本サルコペニア・フレイル研究会のニュースレターVol.2を編集しました。私が高齢者のリハビリテーションに研究を含めて本格的に取り組み始めたのは2010年ころからでした。患者の大半は高齢者であり、日々老年医学との葛藤の日々でした。そんな中で何と言っても新鮮であったのは、2010年にEWGSOPが発表したサルコペニアのコンセンサス論文でした。サルコペニアとそれに関連する事象が、リハ医学や臨床栄養が培ってきた方法論を組み合わせることで解決できる可能性があること、また、それまで漠然と疑問に感じていた、同じ年代で同じ疾患の高齢者でも天と地ほどにリハに対する反応性が違うことも、サルコペニアのコンセプトで説明できることに強く感銘を受けたことを覚えています。10月に開催される第2回研究発表会の募集演題カテゴリーを眺めても、この領域には多くの学問的分野が横断的に関与していることが分かります。多職種での多くの参加・発表をお待ちしております。

(吉村芳弘)

事務局: 日本サルコペニア・フレイル研究会

国立研究開発法人 国立長寿医療研究センター 副院長室

〒474-8511 愛知県大府市森岡町7丁目430番地

TEL: 0562-46-2311(6221)

編集 吉村芳弘